

第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

名 称	第 6 期宇治市生涯学習審議会 第 9 回審議会							
日 時	平成 26 年 10 月 10 日 (金) 午後 2 時 ~ 4 時							
場 所	生涯学習センター 2 階 一般研修室							
出席者	委 員	○	奥西 隆三	○	向山 ひろ子	○	清水 桂子	
		○	門脇 洋子	○	弓指 義弘	○	六嶋由美子	
		○	迫 きよみ	○	大井 悟	×	木村 孝	
		○	杉本 厚夫	×	桑原 千幸	○	長積 仁	
		○	森川 知史	○	小宮山 恭子	○	西山 正一	
	事 務 局	○	藤原 千鶴 (教育部次長(兼)生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)					
		○	松崎 満 (教育部次長(兼)教育支援センター長(兼)一貫教育課長)					
		×	安達 昌子 (生涯学習課主幹 (兼) 生涯学習センター主幹)					
		○	今莊 真樹 (生涯学習課主幹)					
		○	西村 比呂支 (生涯学習課生涯スポーツ係長)					
		○	北池 顕子 (生涯学習課事業係長 (兼) 生涯学習センター主査)					
		○	前田 紘子 (生涯学習課生涯学習係長)					
		×	村上 信之 (生涯学習課生涯学習係主任)					
		○	粕谷 祐次 (生涯学習課生涯学習係主任)					
傍聴者	0 名							

会議要旨は、下記のとおりである。

・ 第 8 回審議会の会議録の一部修正について

前回の会議録について、以下のとおり修正があったため報告。確認を取り既に公開中。

会議録 4 ページ下から 1 行目

×訂正前：「公民館は社会教育・生涯学習の場となる。そのような活動が若い人にもつながってほしい。」

○訂正後：「そのような活動が若い人にもつながってほしい。社会教育・生涯学習の場として、宇治の公民館は素晴らしいと思われるようになればと思う。」

会議録 5 ページ下から 3 行目

×訂正前：「4 月は導入段階として、1 年生の子どもを対象に、お手玉、けん玉、また中学生に来てもらってドッチボールをするなど、仲間と一緒に遊ぶなどの体験をして、また遊びに来てもらおうというものである。5、6 月にはグラウンドで警察による自転車の乗り方教室、」

○訂正後：「4 月は導入段階として、お手玉、けん玉、また中学生に来てもらってドッチボールをするなど、仲間と一緒に遊ぶなどの体験をして、」

第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

また遊びに来てもらおうというものである。6月にはグラウンドで警察による自転車の乗り方教室、

会議録 6 ページ上から 7 行目

×訂正前：「そのあと、子どもを対象に地域コミセンで青少協主催の夏祭りがあった。お祭りは遅くまでやっているが、アルコールもなく、子どもたちは明るいうちに帰すようにしている。子どもたちに最後までお祭りを楽しんでほしい気持ちはあるのだが。

その後、クリーン運動や餅つき大会を開催、

○訂正後：「その他、クリーン運動や餅つき大会を開催、

会議録 7 ページ下から 8 行目

×訂正前：「子どもの居場所づくりは、学校の週休 2 日制に伴い、

○訂正後：「子どもの居場所づくりは、学校週 5 日制導入に伴い、

会議録 9 ページ上から 2 行目

×訂正前：「また、週 5 日制が一般的になってきている状況で、」

○訂正後：「また、学校週 5 日制が一般的になってきている状況で、」

会議録 10 ページ下から 9 行目

×訂正前：「基本的には、学校が週休 2 日制になり社会的にも土・日休みになってきているので、」

○訂正後：「基本的には、学校週 5 日制になり社会的にも土・日休みになってきているので、」

会議録 10 ページ下から 2 行目

×訂正前：「確かに週休 2 日制によって子どもを家庭に返すので、」

○訂正後：「確かに学校週 5 日制によって子どもを家庭に返すので、」

会議録 14 ページ下から 14 行目

×訂正前：「この間キャンプが数回あり子どもと寝食を共にしたが、大変好評だった。また、夏休み子どもフェアでは、サークルの協力を得てお手玉コーナーを設けたところ、」

○訂正後：「この間キャンプがあり子どもと寝食を共にしたが、大変好評だった。また、夏休み子どもフェアでは、サークルの協力を得てお手玉コーナー「作ってあそぼう!」を設けたところ、」

1. 報告事項

(事務局)

平成 26 年度近畿地区社会教育研究大会(大阪大会)について

- ・日時：平成 26 年 9 月 12 日(金) 吹田市文化会館 6 名が参加
- ・全体会：講演「コミュニティが動き出す瞬間～その気にさせるしかけづくり～」
(京都造形芸術大学教授 山崎亮氏)
- ・分科会：「1.地域づくり」「3.青少年教育」「4.学校・家庭・地域の協働」各 2 名参加

(委員)

第 1 分科会では篠山市の社会教育委員が課題提起を行った。二泊三日でもらい風呂の事業を実施しているのが印象的だった。子どもたちが高齢者の家庭で食事と風呂を提供してもらい、昔の話を聞かせてもらうことでコミュニケーションを図っている。過疎地域であることを逆手にとってつながっていこうとしている。助言者の兵庫県の社会教育主事が地域の役割が変わってきたという話をされて、教養を知ることから実践へ、学習交流からグループづくりの支援へという変化についてまとめておられた。

(委員)

第 3 分科会は米原市の社会教育委員がされている、小学生が自分で作詞作曲してマイソングを作る活動について発表された。自分も子どもの指導をしているので、自分の体験と重ね合わせて聞いていた。楽しいばかりではいいものはできない。助言者である滋賀大の神部教授が、達成感は頑張った先にある、自尊感情は他人に褒められたり、頼りにされることで育つと言われ、共感した。

(委員)

第 4 分科会は奈良県曽爾村の教育委員会事務局から、学校と地域が連携して取り組んでいる事業について発表があった。社会教育委員や地域の人がどのように関わっているかについては触れられなかったのが残念だった。質疑応答の中で地域の行事に子どもの協力を求めたら学校側に断られたという事例が出され、宝塚市の人が宝塚ではコーディネーターが学校と地域の窓口になっている話をされた。これまでの審議会でも話題に出てきたことなので、もっと話を聞きたいと思った。

(委員長)

各市町村が集まる大会では、地域によって自治体の規模も、抱えている問題も違うということを感じた。全体講演では主体的に活動するための仕掛け作りについて、成功例を具体的に話されたので興味深かった。こちらから指示をしてやらせるのではなく、自ら取り組んでいく人をどう育てるかということが大事だと確認した。

(委員)

全体会の講演はこれから我々がやるべき方向性を示してくれたと思った。公園を作る時にある一部分だけ設計して、残りの大部分は市民に来てもらってデザインする。参加じゃなくて参画、企画から始まるというのがこれからのボランティアの在り方を示していると思い、非常に印象的だった。

(事務局)

第 24 回紫式部文学賞受賞作品と第 24 回紫式部市民文化賞受賞作品について

・紫式部文学賞：森まゆみ氏 『「青鞥」の冒険』

- ・紫式部市民文化賞：横道しげ子氏 『雪明かり』、沢本彰子氏 『花のことづて』
- ・紫式部市民文化賞選考委員特別賞：鮎風遊氏 『漢字一文字の旅』
- ・贈呈式 平成26年11月16日（日） 宇治市文化センター大ホールにて

歴史資料館特別展について

- ・平成26年9月27日（土）～11月16日（日）『日本パノラマ大図鑑』

宇治公民館の機能移転を進めるにあたって

宇治市の公民館の今後のあり方と宇治公民館の機能移転に求められることについて、公民館のあり方は当審議会でこれまでに議論いただいた内容を整理し、宇治公民館の機能移転については教育委員会の考え方をまとめた。すぐに実現が難しい物については検討・配慮ということになるが、審議でいただいた意見をできるだけ実現できるようにこれから考えていきたい。今日的な公民館のあり方、社会教育・生涯学習の進め方については、当審議会において、改めて研究・検討を続けていただきたい。

宇治公民館については、公民館という看板をそのまま持って行けない。交流センターの一部として、これから公民館活動をどういう風に展開していくのかということ、教育委員会が腰を据えて考えていかねばならない。

（委員）

現在の宇治公民館が移転した跡地利用については何か発表されたのか。

（事務局）

まだそこまでは議論が進んでいない。まずは移転が決まって、これから様々な部署が関わってくると思う。

（委員）

公民館は行政も利用しているが、選挙の投票所としても使われている。今の公民館がなくなると、旧宇治町の人たちの投票所が遠くなって投票率が下がると思う。市全体にとって得策ではないと思うので、何か方策を考えてほしい。生涯学習活動で利用している人たちが末永く利用できる方法も考えないといけない。旧宇治町に施設があることが安心だという人もいる。跡地のことも市が考えた方が前向きな姿勢を示せると思う。

（事務局）

青写真はないが、現在の宇治公民館も福祉やまちづくりなど様々なことに使われているので、今後継承できるのかは留意したいところである。

2. 協議事項

- ・ 今期のテーマについて

(委員長)

前回の審議会では、学校支援ボランティアをコーディネートするという方向で話し合ってきたが、学校で活動している方々がどういう方法で生徒を支えられるのかを考え直し、活動している方々には続けてもらい、何か別の方法で生徒たちをサポートすることについて議論するところだった。放課後に様々なイベントを設けているが、生徒たちをお客さんにしてしまっているのではないか、という発言があった。「生徒を見守る」と言うのは簡単だが、行動するのは難しい。

仕掛けを作るにも、そもそもどういう子どもを育てようとするのかを考えることが必要だが、それは学校教育で進めている。社会教育が関わる場合、違う考え方でいいと思う。人間が充実感を感じることに心理学では、自分で主体的に考え、選び、動くことが必要とされている。やりたいことをやって、目標を達成したときに人は本当の満足感を得るが、目標を達成して幸せになろうとすると失敗する。子どもたちが主体的に選び取ってやっているのかどうか問題だ。

(委員)

土曜日の活用という話があったが、小倉小学校の遊び塾は 2 人の指導者で始められ、今も続いている。組織になかなか新しい大人が入ってこなくて、ずっと同じ人が指導者をしている。これは他の団体と同じ悩みだ。どのような子どもを育てていくか、地域でそれぞれの思いがあるだろうが、それを集約する大人の組織がない。菟道第二小学校でも様々な組織に協力してもらっているが、主に学校側がこういう行事をしたいのでこういう協力をしてほしいと言っている。本来の社会教育ならば、学校と地域が一体となって、どういう地域にしたいか、どんな子どもを育てたいか議論ができたらいいのだが、なかなかそういう組織を作れない。東宇治中学校の学校地域支援本部でもコーディネートに苦労されていたと思う。様々な支援を提案してくれる人が各地域にいてくれたら、学校としてはその提案を受けて、どこまでできるのかを考えて、一体となって進められるだろうが、コーディネーターになってくれる人が現実的には少ない。

(委員)

近畿大会の分科会で、「住むからには楽しまなければ」と大人が楽しんでいたら子どもたちもついてきてくれるのではないかと考えて自分の村のいいところを子どもたちに語っていると聞いたことを思い出した。自分たちの地域でそういうことができているだろうか。一緒に参加して楽しんでくれる大人が増えてくれたらいい。

(委員長)

結局地域づくりをしないといけない。

(委員)

大人のためにやっていたら子どものためにならない気がする。子どもが遊ぶ権利とい

うのはかなり教育的な視点が必要。それをボランティアでまかなうのか、本気で考えてプロを入れるかどっちかだと思う。公園で子どもが遊ぶ姿を見かけないという宇治の現状を直視した方がいい。子どもの遊ぶ権利を守るために地域の大人が動かならば、子どもが遊ぶということにはどういう意味があるのかきちんと勉強する必要がある。自分たちのイメージだけだと勝手な思いになってしまうので、ぶれないようにコーディネーターの元締めはプロが務める必要があると思う。

(委員長)

ボランティアをどう育てればいいのかを考えなくてはいけない。何がプロなのかは難しいところで、自分も含めて教育に関わっている者は本当にプロといえるのか、疑わねばならないと思っている。子どもをどう育てるかという根本的な議論に対してはいろんな立場があると思う。野放しにボランティアをやらせてもらえば良いというのではなくて、ボランティアの在り方を一度問い直して育てていく仕組みが必要。大人が勝手に楽しむことも、これが良い子の姿だと決めて育てようとするのもおかしい。

(委員)

昔からのお祭りが残っているような地域と、新しく集まってできた地域では異なる。根差しているものがない地域で何かを生み出すことは難しい。宇治市内でまんべんなくやっていくならどこの地域でもできる指針が必要。

(委員)

15年前に小倉小学校で体育指導委員をしていた際に、「遊び塾」に参加していた。遊び塾で育った子が大きくなって、下の子に遊びを教えるようになり、最初はうまく行っていたが、学校外のゲームセンターに年上の子が年下の子を引き連れて遊びに行くようになり、問題になったこともある。立命館宇治高校の生徒が授業の一環として土曜日に来てくれることになり、隔週で年上の子が指導する週と立命館の子が指導する週ができたが、遊び方が全然違った。今はもう立命館の子は来ていない。いろいろあって、現在指導者は2人となっている。

遊び塾卒業生は命令調で年下の子を引き連れて遊ぶ。年下の子たちも地元のお兄ちゃんだと慕っている。立命館の子はまず子どもに「何がしたい？自分たちのやりたいことを言って」と尋ねる。用意されている遊び道具を使いたい子はそれで遊べばいい。何もしなくてもいい。子どもたちにも考えさせて、お互いで遊ぶような感じだった。

(委員長)

心理学の実験で、同じ単純作業でも自分の好きなキャラクターを選べる工程がある方が、モチベーションが上がるという結果が出ている。選ばせることから始めるというのが、遊び塾卒業生と立命館高校の指導方法の違いではないか。

(委員)

指導者もバトンタッチができると思っていたが現実にはできなかった。様々な活動があるが、本当に子どもたちのニーズに合っているのかを検討する必要があるのでは。

(委員長)

ボランティア団体も高齢化して活動を続けられなくなっている。

(委員)

PTA 役員をやっていた頃に学校地域支援本部には関わったが、その後も学校を応援したいという気持ちがあった。学校がやりたいことのお手伝いや下請けは目指すものではないと思っていた。PTA を離れ、民生委員をやっていると、学校支援では足りないと感じる。当審議会でもよく出る意見だが、生まれた時からの支援や社会教育の関わりが必要と感じている。できることなら本拠地を公民館など学校とは別の場所に置いて、0 歳児から関わられるような地域を作るという大きな考え方が必要だと思う。

(委員)

主体性を持った子どもを育てるために、大人がどういう存在になるべきかを考えなくてはいけない。「させたい」、「しなければならぬ」ではなく、子どもたちがやりたいようにできる環境作りという発想で、仕組み作りやボランティア養成ができないか。大人の意図に方向付けしないよう、子どもが自己決定できるように。何もしないという選択肢も与えて、子どもから湧き出てくる気持ちを大切にできる環境を作らないといけない。

(委員長)

抽象的に言うことは簡単だが、具体的な仕組みを作っていくのはかなり難しく、まして「作ったら終わり」ではない。

(委員)

子どもが何もしないことも選択肢と言うが、放っておいたら何もしない子が多いのでは。私が教えている子ども達も自ら何かしたくて来ていると思うが、どう思うか聞いても「ふつう」、楽しいことでも何でも「ヤバイ」と表現するので、何を考えているのかわからない。年を重ねた者から見ると、もったいないと歯がゆく思い、つい口を出したくなる。何かきっかけを与え、内面を引き出してやる必要がある。

(委員)

自分が定年を迎えるにあたり、次は地域のために何かをしようと考えた時に自分の特技を活かそうという人は人材バンクに登録したりすると思うが、地域の人々と一緒に地域を盛り上げたいと考えている人はたくさんいるのではないかと。そういう場所があれば参加したいが見当たらない。そういう組織づくりを行政で段取りする必要があるのでは。

ボランティアという範囲は広くて何をしたいかわからないけど、地域のために何かしたいと思っている人はたくさんいるはずで、そんな人達が活動できる組織が必要。

(委員長)

本来公民館がその役目を果たしていたはず。

(委員)

その通りだと思う。地域に何があるかわからない。同じ会議に呼ばれていて顔見知りだけれど、どこでどんな活動をしている人なのかわからない。何か活動している人達がいることはわかるけれど、自分がどう動いたら良いのかわからないらしい。見守り隊のメンバー募集チラシを全戸配布しても反応がなかったりする。

(委員長)

学校支援にしても、現実的にやっている人はたくさんいるのに、いざ自分がやろうと思うとどこへ行けばいいのかわからない。

(委員)

そうして、活動している人はどんどん高齢化していく。

(委員)

最近の子どもは、集団登校を見ている、時間になったら出発する。遅れてくる子はその子が悪いので迎えに行かない。遅れる子も団体行動は嫌だから自分のペースで行くと言う。両極端だ。個性的になるよう育てられているのか。

(委員長)

小学校高学年くらいからけんかをものすごく恐れている。けんかが本当に仲良くなるきっかけになったと大学生に話すと、けんかをしたことがないと答える。小学校高学年から大人のような付き合い方をして、周りを見て顔色を窺っている。子どものメンタルが変わってしまっている。人と深く付き合うということを知らないまま大学生になっている。仲間と群れて遊ぶ経験もあまりないようだ。

(委員)

争いを苦手とする母親が、遊びの広場で自分の子どもがよその子におもちゃを取られようとしたときに止めて、「貸してあげなさい」と割って入る。けんかも大事だよと母親に話をしたりするが、やりすぎると広場に来なくなってしまう。言わないといけないこともあるが、母親を傷つけずにどう伝えたらよいか難しい。臨床心理などの専門知識を持っていないスタッフが、たくさんの母親の個別事情や生い立ちを聞いて対応することまで引き受けなくてはいいけない。また、子どもを室内の広場から、公園での外遊びへ

返してあげたい。宇治には集会所や公園がたくさんあるのに活かしていないのもったいない。集会所を地域の子どもの居場所にしてくれたらと思う。公園の砂場の整備をしてもらって、犬猫のふんなど気にせず遊べるようになれば、きっと親も地域の人に感謝するようになると思う。

(委員)

集会所というが、町内に管理人がいるから同じ町内の人でないと気軽に借りられない。

(委員)

よそから来た人には貸してもらえなかったり、汚してしまってすごく怒られて、次からは借りることができなかつたりした。町内の人とそうでない場合では違う。

(委員)

東宇治コミセンで活動していた人が改修工事期間中に別の場所を探した。自分が知っている人が管理人をしている集会所にしか話を持って行けなかつたとのこと。

それと、どうしても何かやるとなると子どもがお客さんになってしまう。

(委員)

仕掛けすぎて、欲してもいないのに与えるのは良くない。欠乏状態がないからわくわくしない。子どもの居場所の話題でいうと、岡山県総社市の、合併前にあった清音村というところでは、totoのお金で学校のすぐそばに地域スポーツクラブのクラブハウスを建てた。学校に隣接しているから子どもが集う。仕掛けは特になくて、漫画を読んでいる子もいれば勉強している子もいる。何かやっていることは情報として入ってくるが、何をやるかは自分次第。与えられているけれど、するかしないかは自由。自分たちが子どもだった頃のように、そこに行けば何かしている子がいるだろうと安心して行けるような場所があれば。安心安全というとシステムティックに考えがち。

(委員)

遊びとはこの状況だと思う。大人がどこまで待てるかだ。さきほど出た意見のように、舞台が用意されているのにと歯がゆくなるのは押し付けだと思う。

(委員)

昔やっていたサッカー教室で何もしない子がいた。声掛けはするけれど、無理にはさせなかった。子どもは他の子が楽しそうにしていると入りたくなるもので、それまで待つ覚悟がこちらにも必要。「せっかく用意したのに」、「子どものために」という考え方は押し付けだ。生涯学習は長い目で見えるもの。待つ時間があるから、将来自分が自主的に何かをやっていく力がつくのだと思う。この時間すら待てないという時間感覚が問題なのでは。

それと、遊びに対する幻想が大きすぎるのではと思う。「子どもは遊ぶものだ」、「遊びは教育に必要だ」などと言われると、大人が子どもに遊びを押し付けていることになる。子どもは遊びに現実を持ち込んでいる。かくれんぼができない子どもというのは、いじめと同じだと思ってできない。一人を鬼にしてみんなが隠れるという、現実ならいじめだ。遊びの中で完結するという事は担保されないで現実にもひきずってしまう。遊びは教育にいいものだと思ってしまうと、遊びが遊びでなくなってしまう。

飲み会での無礼講というのは礼儀をわかっていて、現実には上下関係があるから、今日は上下関係なしで行こうとなる。子どもたちの中では現実と遊びが混在している。基準をわかっていれば遊びの世界を担保できるはず。まず、遊びはいいものだという考え方から外れないと、本当に遊びが子どもたちにとって必要だと言えないのではないか。

(委員長)

現実を盛り込まないで、遊びの中で完結するような遊び方を子どもたちにさせるにはどうするかが難しい。大人の思い込みを持ち込んではいけない。

(委員)

追いかっこをしているだけで怒られるという現実を何とかしてほしい。ボールを蹴っても怒られないからという理由でサッカークラブに入る子がいるらしい。変えなくてはいけないのは大人の意識だ。

(委員長)

「ご近所の迷惑になるので静粛に」と看板に書いてある公園があると聞いたが、それは公園とは言えない。子どもの声が騒音だからと保育所を建設できないという報道もあった。

(委員)

子どもは騒ぐものだというトレランス(寛容性)が少なくなってきた。公園は騒ぐ場所として解放区にしていいと思う。遊び場がないと言うけれど、果たして本当なのか。逆にこれが遊び場だというものを作ってしまうと遊ばなくなってしまうのでは。子どもは遊んではいけない場所で遊ぶもの。昔も路地で遊んだものだ。

(委員長)

ペスタロッチの言葉で「子どもを不幸にしたければ何でも与えなさい」という言葉がある。

(委員)

学校側の人間の立場としては「遊び場で遊びなさい」と言わざるをえない。

(委員)

子どもの遊びを地域の大人に理解してもらうのが社会教育の役目ではないか。遊びの場を自分たちで見つけて遊ぶ、昔の秘密基地のような遊びができなくなっている。そこを変えていくのが社会教育。学校ではできないこと。

(委員)

この頃の住宅地開発では袋小路を作っている。小さい子がそこで遊んでいる姿を見かけた。通過する車がないから安全。住宅会社も考えて開発してくれたらと思う。

(委員長)

こうして話していても、我々も発見がある。これをもっと広めなくてはいけない。

(委員)

物事を広める、展開していくとなると、負担になる。当審議会委員の中に民生委員が複数人いる。地域ごとに子育て支援のサロンをやっているが、やり方もみんな違う。自分のところはゴザだけ準備して、他は何も用意していない。これで人が来るのかなと思っていたが、最近が増えてきている。お母さん同士がしゃべっていて、その周りを子どもが走り回っている。参加者を迎える形にすると大変になる。

(委員)

私は親どうして遊ばせたいと考えるが、私の地区の委員長は何から何まで持ってきて作りこんでやりたいタイプなので、年に 2 回だけ何も準備せず親どうしが話せる月を作ってもらっている。遊びがあると、心配事を話す雰囲気にならない。遊びがいいという親もいるし、話すだけがいいという人もいる。親にも民生委員にも様々な人がいる。

(委員)

自分が残念だと思ったのは、参加者から「他にも子育てサロンはないか」と訊かれたときに答えられなかったこと。近くの保育所でも子育て支援事業をしているが、民生委員のサロンの存在を知らない様子だった。ネットワークがないために、誰がどこで何をやっているかわからない。参加者の取り合いになっているのがもったいない。積極的な人は車でどんどん出かけていく。需要はたくさんある。

(委員長)

先日の小学 1 年生が行方不明になった事件でも、学校で連絡網を配らないから親どうしが連絡できないと報道されていた。つながりを阻んでいるものがたくさんある。

(委員)

以前、旧京北町でイベントを開催した。合間に紙芝居や絵本の読み聞かせをしたら、

遊びまわっていた子どもがすぐに寄ってきた。親に話を聞くと、TVを見せずに絵本を読み聞かせている人が多かった。与えすぎていない。宇治では見かけない様子だった。今の親は子守唄を歌えないので、年配の方から教えてあげてほしいし、民生委員のサロンで子どものあやし方なども教えてほしい。60代や70代の方が得意だと思う。お年寄りとお若い親が繋がれば、地域での関係性も変わるのではないだろうか。

(委員)

語り継いでいくことは大切。親子キャンプを30年以上やっていて、お米をとぐことや竹鉄砲の作り方を教え、自分の知っていることを還元していく。キャンプの自由時間に遊んでいいよと言ったら、山に分け入って秘密基地を作ったりしていた。生き生きしている姿を眺めていると気持ちが良い。地域のパトロール時間を夜8時から月に一度だけ放課後の4時に変えてみた。今の子どもは夜に公園にたむろしていない。夕方に公園で遊んでいる子どもたちに接することができて私たちもうれしかった。

(委員)

学校教育と社会教育が一体になってやっていくにしても役割分担が必要。学校の顕在的カリキュラムではない、潜在的カリキュラムを社会教育が担っていく。今の社会教育は学校教育と同じことをやっているのでは。全国社会研究大会京都大会のときに「見て見ぬふりではなくおせっかいな社会」を掲げたが、鷲田清一さんが言った「見ぬふりして見ている社会」が必要になってきたのではと考えが変わってきた。例えば児童の登下校の見守り隊のようなものがこれからの接し方として重要ではないか。「安心して寄り道ができる社会」が豊かな社会だと思う。視線を感じると子どもは遊べなくなる。イギリスには「ネイバーフッド・ルッキング・エリア」という看板がある。近所の人が見ている地域なら安心して寄り道できる。

(委員)

先ほど立命館宇治高校のボランティアの話が出たが、実は私の子どもが参加していた。事前研修で見守ることを教えられてから参加する。見守ることを教えてくれる人と出会えば、動きやすくなるのでは。高校でのボランティア体験が楽しかったから、と別のボランティア活動に参加したところ、重労働と過大な責任を負わされてボランティア活動に失望した子もいる。志を持った子を広い気持ちで見守れるように大人がならないと。

(委員)

14,5年前にどこかの市町村で「3世代の遊び場バンク」というのをやっていて、60代70代の人、30代40代の人、今の子どもがそれぞれどこで遊んでいたかをマップに落とし込んで「遊び場が減っているな」という話題から「子どもの遊びを何とかしないと」、「協力する人を増やそう」という議論になっていた。

(委員長)

まだまとまった話にはなっていないが、深いところまで話が出てきている。特に社会教育が学校教育を支えるには何が必要かということが見えてきたように思う。続きをまた議論していきたい。

(委員)

先日の近畿大会で、橋本市の社会教育委員を長年務めている人の話を聞いた。年に 2 回しか委員会が開催されないため、自主学習会を始めた。地域を知ることから始めて、いつでも市の諮問に応えられるようにとの思いがあるとのこと。そのような活動をされている市町村もあるということ参考までにお伝えしておく。

3. その他

(事務局)

第 56 回全国社会教育研究大会(徳島大会)について

- ・ 10 月 22 日(水)～24 日(金) 門脇委員長職務代理、向山委員が参加の予定。

平成 26 年度京都府社会教育研究大会について

- ・ 平成 26 年 11 月 27 日(木) 綾部市中央公民館。分科会についての詳細は未定。

第 32 回市民スポーツまつりについて

- ・ 平成 26 年 10 月 13 日(月・祝) 午前 9:30 より山城総合運動公園「太陽が丘」

「生涯学習の秋！人材バンクの展示と体験コーナー」の開催について

- ・ 平成 26 年 10 月 27 日(月)～31 日(金) 市役所 1 階ギャラリーコーナー
期間中、展示は常設。体験・実演は日替わり。

大西利治文庫創設記念式典及び子ども読書推進事業の開催について

- ・ 平成 26 年 10 月 18 日(土) 午後 2:30～ 宇治市文化センター小ホール
絵本作家の宮西達也氏による講演

第 33 回宇治市「中学生の主張」大会について

- ・ 平成 26 年 11 月 8 日(土) 午後 1:30～ 宇治市文化センター大ホール
- ・ 市内 11 中学校の代表生徒による主張発表、南宇治中学校中国文化剣術部によるアトラクション

(委員)

宇治のご当地キャラ「チャチャ王国のおうじちゃま」と「ちはや姫は」どう違うのか。

第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

(事務局)

おうじちゃまは商工会議所が管理している。市の公認キャラクターはちはや姫で市が管理している。